

近江の
不思議

元祖ものづくりプロフェッショナル

全国木地師の聖地はいま…

「木地師きじしのふるさと、小椋谷おぐらだに」といっても

近江の人にさえ、その実態が伝わりにくい時代になってしまったようです。

そもそも木地師とは？

全国の木地師にとって、なぜ近江は「聖地」なの？

木地師と近江の不思議な関係を追いかけます。

ろくろ(現在は電動)による木地の加工(写真上)と木目が美しい盆(同下)君ヶ畑のろくろ工房「君空(きみもく)」にて

ものづくりに魂を吹き込んだ惟喬伝説



蛭谷の入り口。ここに移り住んで活動を始めたろくろ工房もある



君ヶ畑には茅葺民家がよく残り、いずれもトタンが被せてある

外なほど近いのである。小椋姓だったことに惹かれたという。東北と近江の山の文化は、意

森のオキテに則って資源を活用

山には山の民、 森には森のオキテ

は多いが、近江の湖東一帯にはとりわけ目立つ。さらに愛知川をさかのぼった小椋谷は、親王の母方の領地であったことから、親王が身を寄せた可能性は十分にある。その隠れ里で親王がろくろの技術を考案し、地元の柚人に伝授したのが木地師の起源であるとして、親王は木地師の祖神となった。



君ヶ畑に伝わる惟喬親王と家臣たちの手挽ろくろ伝授絵図(複製、工房「君空」の掛軸より)

ろろ。各藩の産業奨励で漆器生

産が拡大した。東北のこけしや会津塗は、近江日野の蒲生氏郷が秀吉の命で会津の領主となつた際、近江から木地師を連れて行ったことに始まる。山から山への渡り木地師だけではなく、一方では近江から東北へとひとつ飛びで最新技術を伝授したのち、その末裔一族が東北に木地師村を開いた例もある。



君ヶ畑にて。惟喬親王の御殿だったとされる高松御所(金龍寺)のそばに、親王墓と伝わる古墳と宝篋印塔(ほうきょういんとう)がある

木地師は史実と 伝説のはざま

木地師の歴史は古い。遅くとも奈良時代にはろくろ工が活躍していた。ろくろもおそらくは渡来人がもたらした先端技術だろ

お椀やお盆、しゃもじやヒシヤクは本来、木でできていた、ということを実感できるのは、どれくらいの世代までだろうか。はたと気付くと、木の道具を知らない世代が増えていく。古くには食器類など、生活道具の大半は木から作られていた。そして、それを仕事としたのが「木地師」と呼ばれる職人。ろくろを用いるその技はものづくりの原点として、現代の先端産業にも活かされているという。木地師こそ、日本のものづくりの元祖といえそうだ。



蛭谷からさらに奥まった筒井峠の旧跡を見守る惟喬親王像

うが、発祥にまつわる史実は伝わっていない。そこにサプライズな伝説が生まれる。いったいいつからこうなったのかは定かではない。が、これが世に名高い「惟喬親王伝説」で、やがて日本の山々を伝説が駆け巡ることになる。

悲運の貴公子である。平安時代、第一皇子でありながら藤原氏を母にもつ第四皇子(のちの清和天皇)に皇位を奪われ、都を追われた。彼への同情は文学や説話に長らく語り継がれ、人々の涙を誘った。そのためか親王に伝説

山の文化、木地師の文化を小椋谷から

同時代を疾走した
近江商人と氏子駈

木地師はいつかは姿を消す。小椋谷でも「筒井千軒」といわれて隆盛したのは中世以前のこと、近世以降は木地師の里に木地師のいない状態も珍しくはなかったようだ。

そんな江戸時代に、第二のサブライズが起こる。木地師の消えかけた小椋谷が全国木地師の統括支配に乗り出したのだ。考案したのは蛭谷のようで、君ヶ畑も遅れて同様の体制を敷いた。すなわち、近江から全国各地の木地師を数年ごとに巡回し、「われは近江小椋谷の出身で、蛭谷の筒井八幡宮か君ヶ畑の大皇大明神の氏子であり、蛭谷の帰雲庵か君ヶ畑の金龍寺の檀家である」とを証明して、身元保証ともいふべき宗門手形や往来手形を木地師に発行。それだけではない。困り事があれば解決し、道具や金銭を貸し付け、仕事や生活の



菊の御紋を掲げる高松御所。蛭谷の公文所とともに全国木地師を統括する役所でもあった

最新情報を提供する。木地師は引き替えに氏子料や負担金を徴収されるが、これは定住地のない木地師たちにとっては願ってもない保護だった。

何よりも親王由緒の菊の御紋入り木札は、いわば黄門さまの葵御紋の印籠、いやそれ以上の威光として、小椋谷出身でない木地師までも取り込んだ。木地師なら生涯一度は小椋谷に親王参りを、といわれた近江木地師のブランド力であった。この全国巡回を「氏子駈(君ヶ畑では氏子狩)」といい、貴重な記録となつている。時を同じくして湖東からは近

子を抱え、その関係を維持している。毎年七月の海の日、蛭谷では「惟喬親王祭」が開催される。今年で二十二回目。筒井峠の旧蹟に、関東や北陸、東海からも木地師、木工、挽物関連の団体・個人の氏子らが集まって、蛭谷に人影が増える。今年も男女とも若い木地師が育っていたのが朗報だ。小椋正清・東近江市長は蛭谷出身で、「求む山の応援団、木地師

の応援団」と、市長と住民一人二人で熱弁を振るつた。木地製品を取り巻く状況は厳しくはあるが、新しい蛭谷へのスタートを予感させてくれた。



上/菊花紋入りの木札。木地師の七つ道具のうちでも憧れのお墨付であったに違いない。下/江戸時代の氏子駈帳(いずれも蛭谷・木地師資料館に展示)



この夏も盛大に開かれた惟喬親王祭(筒井峠旧跡にて)

江商人が、それ以前には甲賀の忍びも全国を行脚した。「氏子駈」の全国巡回制度がそれらと無関係にあったとは考えにくい。

木地師の聖地に
新たな予感

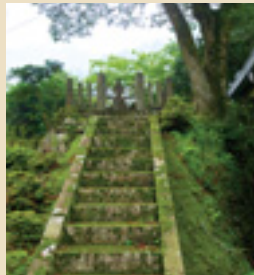
「氏子駈」は明治の半ばまで続いたが、実質的には明治の新戸籍によつて、木地師の統括支配は終了した。全国木地師が蛭谷・君ヶ畑からそれぞれの居住地に戸籍を移すことになったためだが、それは山の民が山の民らしく生きられなくなることもあった。

小椋谷には普段から、ルーツをたどる来訪者がぼつりぼつりと現れる。木地師とはすつかり無縁になつた子孫が、かつてのものづくりプロフェッショナルの結びつきに驚いたり、木地師の聖地に初めて立つ人もいる。小椋谷はひっそりと、しかし矜持を失わず、わずかなつた住民が神社のお世話を続けている。

湖東に多い惟喬親王伝説

千年以上前、都を追われた親王がどんなルートで移動したかは不詳である。が、親王隠棲の地とされる京都大原などを中心に湖東一帯、三重県側まで親王伝説は数多い。木地師街道の始点・政所(まんどころ)にも木地師の旧跡が残り、政所八幡神社に伝わる古能面の数々がその由緒を偲ばせる。君ヶ畑の北方、多賀町大君ヶ畑(おじがはた)周辺にも親王伝説がみられ、その地名が示すとおり木地師の拠点があったはずだ。

近江八幡市の千僧供(せんぞく)町や御所内(ごしょうち)町も、親王ゆかりの地名とされている。愛荘町八木神社、東近江市小八木の春日神社にも親王参詣伝説がある。まさに伝説に彩られた惟喬親王であった。



政所八幡神社にある親王ゆかりの宝篋印塔

Profile) 文・写真 ● 黒田正子(くろだまさこ)

編集者・エッセイスト。京都人も知ってそうで知らない身近な「不思議」を追跡する『京都の不思議』『京都の不思議II』を出版。著書はほかに『京都語源案内』『それは京都ではじまつた!』(いずれも光村推古書院)など。

参考 『永源寺町史』(永源寺町史編集委員会/永源寺町2001年)
『滋賀県文化財調査報告書第1冊』(滋賀県教育委員会1965年)
『全国のお山々を駆けめぐった木地師の里を訪ねて』岸本治二(2010年)

惟喬親王を祀る大皇器地祖(おおきみきじそ)神社(君ヶ畑町)。
参道を進むと杉の老樹におおわれた聖域が広がる